

Academic Learner に与える初期段階の
英語教育のあり方:
市販されている児童英語教育テキスト批判に
立脚して
(研究報告と提言)

濱 野 成 生

はじめに

日本女子大学附属校園における一貫教育としての初期英語教育はいかになされるべきか。これは学内の一貫教育研究集会において再三話題となったことである。だがいまだに明確な方針を出すにいたっていない。この理由はいくつか考えられる。一つは、当該校園の教育課程については、一貫教育とはいえども、その主体性を当該校園に委ねるべきとする基本的な考え方にある。また筆者のように語学教育を専門としない者が論じることへの遠慮や抵抗もある。さらには児童英語について、現場経験の少ない者が論じるべきではないとする考え方もある。

したがって筆者は長年憂慮してはいても、火急の必要性を感じる立場ではないゆえ、真正面から取り組むことを差し控えていた。しかるに最近の日本における児童英語教育の趨勢を見るに、もはや逡巡している時ではないと考えるにいたった。学内における諸般への配慮から初期英語教育改革のための提言を躊躇しては、かえって本学の一貫教育の充実度を疎外するであろう。また本学がその个性的教育を標榜するにあたり、マイナスになるであろうとも考えられる。このような判断から、このたび敢えて児童英語教育に取り込むことにした。

但し筆者は初等中等教育の分野で経験がないわけではない。筆者自身の

専攻は一貫してアメリカ文学であるが、学部在学時代から卒業後8年間は中学高校において英語教育に従事している。そこは全国有数の進学校であり、実力養成の基本をそこで学び得た経験は後に大いに生かせることとなった。有名大学に何百人合格させるかということは、たんに答案解法の技術に留まらない。ノートづくりの効果的方法から、“知識の溜め”を目指した勉強計画の立て方まで、勉強法全般に渡り、継続して指導した。勉強部屋の机と本棚の配置指導までおこなったこともある。

並行して某出版社が展開する全国模試の作題を十数年おこなった経験もある。受験参考書も出版した。英文法、英単語、英熟語の単著のほか、中学から高校へのブリッジ教材まで。学者としての研究業績に入らない、かくれた部分だが、英語の基本を徹底して磨く時期であった。受験雑誌に英文解釈講義も連載したし、数十回におよぶテレビ英文法講義もした。大学に籍をおいてからは、文部省検定高校英語教科書の審査員を務めたこともある。

つまり筆者は受験英語という避難的的を十数年にわたり、やってきたことになる。その目で児童英語を見たわけであるが、そこには水準もなければ一定のメソウドもない、実力養成の段階もまちまちで、第一、高度な英語を志向する努力目標も定かでない、混沌たるものであった。

筆者はしかし、受験英語にはつきものの、選択問題や穴埋め問題の当て方指導や選択肢をあたえられての消去法による内容一致問題の当て方技法など、得点アップだけが目的の問題解法テクニック偏重教育には常々反対の姿勢をとってきた。また、長文を分解して主節と従属節に分け、構文を分解する、判じ物を解くがごとき解法にも、反対の姿勢をとっている。英語は英語のまま理解することが大事で、訳し上げ技法などをいつまでもやっていると、とうてい1000ページの長編読破などは覚束ない。英文は絵である。思想である。事件伝達である。そこにこめられた著者の意図、思想、描かれた状況を明確に理解できれば、日本語でも難解な英文を朗読のスピードで理解することが可能となる。このような力の付け方を常々説

いてきた。また語彙数増強について言えば、できるだけ確な用語をたくさん知ることが大切。卑近な用語ばかりをバラフレーズして表現するやり方では、思考能力を高度に磨き上げることができない。

筆者はこのような観点でこんにちの英語教育を見ている。児童英語についても同じである。今日のコミュニケーション全盛時代、ともすれば、ロジカルな英文構築は疎んじられる傾向にある。現代の英語教育は、街歩きやキッチンレベルである。これでは早晩、日本人全体の英語力が低劣なものに下落するであろう。これは、ハワイの日系人の日本語教育と同じである。因みに、戦前のハワイにおける日本語教育は歴史教育や漢字教育に徹した、日本の初等教育とまったく遜色のないレベルで推移していた。そのため、二世には、非常に高度な日本語を駆使して演説できる人々が多く輩出した。だが戦後、日本語教育はアメリカンスクールに委ねられ、その題材も歴史教育から、買物レベルになったがために、日系人のほとんどは、片言の日本語さえ満足に話せない世代ばかりとなった。日本における現行の児童英語では、将来、ろくな人材を育てることはできない。

本学における英語教育では、まず、当初の基本姿勢として、このような通俗性に染まらぬことが大切である。英語学習ではスピーキングやリスニングも大事だが、題材が通俗的なものばかりでは、リーディングとライティングにおいて、確実に低級化する。“知識量”の不足は、ロウ・ブライウな英文を引き出すだけであって、国連など、国際舞台に立つ人材を輩出することはできない。

この観点に立って筆者は児童英語教育の現状を観察したわけであるが、その目に映ったものは、嘆かわしいというか、将来性を危惧せざるを得ないような、惨憺たるものであった。本論では市販テキストを題材に、まず現状を紹介し、それを批判しながら、本学における初等段階の英語教育がいかにあるべきかについて、確たる方向性を提示する。

この論考はまた、先日、英文学科の賛同を得て学会出席をはじめ、児童英語教育に関する多くの資料収集を委ねられたので、その中間報告の意味

も兼ねる。

なお、本論における教材研究では、目下市販中のテキストを数多くサンプル・スタディとして、使用している。その多くを、筆者は理由を添えて、明確に悪書とみなしている。しかし本論は、書評のたぐいではない。本論の趣旨は書籍の内容を批判することではなく、これらの内容不備を踏まえて、本学園の初期段階における英語教育のあり方を確定させ、それに相応しい教材を作るガイドラインを提示することにある。したがってその性質上、市販テキスト名を名指しで俎上に置いて論評することは避けた。むしろ多種多様な教材に共通した難点を挙げ、総括的に論じる方法論を採って、本学園の作成すべきテキストのコンセプトを演繹的に導き出すことに主眼をおいている。序論は以上であるが、以下の本論はしたがって、この基本課題に立脚したきわめて実践的な見地に立脚した論評であると心得られて、読み進めていただきたい。

I. 日本における小学校英語教育の現状

1. 制度としては、まだまだ未成熟の現状

(1) 英語を“道具” & “知識”として確立されているか

日本における小学校英語教育は、現在、試行段階にある。文部科学省は公教育として全国の公立小学校に英語教育を実施するよう、その制度化を進めているが、諸般の事情により、その活性化は遅々として進んでいない。その主たる原因は英語教育の方法論がまちまちであること。教師側の準備段階がまだまだ暗中模索の状態にあること。学校自体が明確な方針を打ち出していないこと。以上の3点である。したがって、ほとんどの小学校では英語教育を教師の指導法に一任している。前向きな取り組みを行っている学校でも、せいぜい working holiday で来日した英語圏の青年と、英語教育に関心を示す日本人教師とが team teaching をして、月に数度、英語授業を行っているにすぎない。それも正課として段階別に教育効果を積み上げる目標をもち、それにふさわしいシステムを構築させているわけではな

い。たいていの場合、英語教育に熱心な教師が英語の雰囲気になれる喜びを児童に味あわせる程度にすぎない。したがって小学時代に、英語を、将来役立つ“道具”として、また語学をきちんと理解する“知識”として、自覚して習得する制度が確立していない。言い換えれば、このような授業を何年間続行しても、英語の実力など、つきそうにないのである。

(2) 児童英語教育研究ははまだ実験段階

① いまだ“実験段階”の取組姿勢

現段階における児童英語教育研究は千差万別である。意欲的な学校というよりも、意欲的取組姿勢にある教師個人がさまざまな試行錯誤をおこない、実験的な教育をおこなっている段階である。したがって、その教師が校務多忙で研究時間を十分もつことができなければ、せっかくの研究成果もそのまま埋もれてしまう。その意味で、公教育における小学英語教育はまだまだ暗中模索の状態にある。義務教育における必修科目として全国的に固定化し、教育効果を上げるには、まだ時間がかかるであろう。

② 研究授業は多彩だが効果は疑問

それでは例外的に児童英語教育の研究に熱心で、実験的な研究授業に取り組む研究者はどのような方式を採り、成果を上げているか。かれらは英語教育に遊技、ゲーム、歌、ダンスを導入。音楽、体育、家庭科など、他教科との連携も行う。だがこれらの試みはいずれも準備に時間が掛かる。また継続性をもつことが難しい。時間割や他教科の都合に左右される。聞き取り調査からその実情が判明したが、たいていの場合、1回から数回程度のトライアルで終わっている。また教師側が誰しも、学習者がまだ幼いのに、“英語嫌い”にさせては大変という恐れから、ヴァラエティに富ませた遊び感覚を導入している。結果的にどうなるか。生徒はその時間中、授業には楽しめるが、予復習を見込んだ積み上げ方式ではないから、その場限りに終わるのである。

③ 他校の実験教育の導入よりも、自校独自の教育レイアウトを敷くこと

上述した実験授業をここで統計的に調査し分析しても大した意義はない。千差万別のトライアルは一貫性を欠く。他校において、継続的な教育が実践され、実績がめきめき上がってきた、ということもない。そこでまず他校の実例を下記のごとく総括し、各種児童教育の実態をふまえて、アカデミックな一貫校らしい、独自のレイアウトを提示する。

II. 現行の児童英語教育の問題点

わが国における児童英語研究は今や避けて通れない大きな研究テーマとなっている。それは幼児期の英語教育が後の英語教育に大いに影響するからである。したがって、児童英語の目標を謬ると、かえって悪い結果を生むと考えられる。ティーチング・メソッドを違えても同じである。せっかく資質の良い学習者でも、目標とメソッドを間違った教育を与えれば、かえって学習者を鈍化させる可能性もある。日本における児童英語のゲシュタルトはその意味で、かなり危険な要素をはらむと考えられる。その主たる理由を以下に述べる。

1. 目標値低く単純化されたイントロに混在する難解性(初学者に戸惑い現象を与える)

まず挙げられることは、現在、全国でおこなわれている児童英語の目標値が全般的にきわめて低いことである。語彙数が数十から数百程度。しかも同年齢の国語や作文、漢字の習得量と比較して、格段に少なくしかも単純指向にある。英文は短い単文が多い。英語は外国語であるから、母語より論理的に単純なものがよいという、因習的な通念から脱却していない。思考する内容を単純な文で叙述すると、かえって、観念的・抽象的となり、初学者には不可解な要素となるという考慮がまるでなされていないものが多い。語彙数が少なければ少ないほど、学習者は戸惑う。しかるに単純な文は理解しやすいと考える。したがって内容的に面白みにも欠落し、不可解な印象だけがどの文にもつきまとう。例えば、What's this? や Who is

this? といった短文である。ここにある 's や is を「です」などと説明しても、児童には腑に落ちない。また、「誰」と「これ」がどうして is で結ばれているのか、これも理解しがたい。そのような、漠然とした疑問を多々学習者に与えていることを、制作側はまるで斟酌できていないのである。

日本人の初学者にはきわめて不可解な is, am, are, was, were という be 動詞の形態変化と、be 動詞そのものもつ、文中における存在意義について、たいていのテキストは、なんら説明的配慮をしていないし、習熟して理解させるための pattern practice もやらせていない。だから学習者には、この be 動詞の存在意義を解せぬまま、主語と主格補語の関係について、漠然と学ぶことになる。また補語と目的語の相違も判然としないまま、進行することとなる。しかも He's not や I'm not のように、is や am が省略形で出るため、学習者は複数の s や、三単現の s との区別がつかず、最初からつまづくのである。

この現象を斟酌しない制作者は、英語国民として生まれた児童が慣用として理解できても、親子の対話が英語で行われることが皆無にちかい日本人の児童に、慣用理解を期待してもとうてい無理であることに気づいていないのであろう。したがって、用法の説明や pattern practice の欠落したテキストは、結果的に悪書となって、いたずらに児童を、「英語とは、むずかしいもの」という印象を与えるのみである。

2. 英語学習とは無関係な“遊びの要素”が多すぎるテキストが氾濫

英語学習を何とかして楽しませよう。その配慮がまちがった方向に発展したのが、現在流布しているテキストである。児童はこれがため、かえって勉強意欲を削がれるだろう。

市販されている大多数のテキストが、遊びの姿勢、楽しませる工夫を、英語そのものより先行させている。イラストのスペースが英語記述の5倍、10倍とある。しかもけばけばしい満艦飾ばかり。漫画本、絵本のような絵

ばかり。肝心の英文がすみっこにあり、判読しにくいものさえある。それで学習者が楽しむと短絡に考えるのは愚か以外の何物でもない。英語そのものを楽しまず、イラストを楽しむテキストなど、やはり悪書以外の何物でもない。ひところ、付録を7つも8つも付けて、それで子供たちの購買意欲をそそり、売上を伸ばそうとした少年少女雑誌が沢山あった。少年たちは紙製の工作をやりたい一心で雑誌を買い、本文は活字ばかりで、読まずに終わる。これと同質の釣り込み作戦が顕在しているのが、現時点の、大半の児童英語テキストである。出版社はどれも売上を伸ばさんと必死だが、地味なものでは売れませんとばかりに、派手派手しいイラストを満載したのでは、迷惑するのは学習者側である。英語の時間、先生は使いにくいテキストだと苦心惨憺。生徒側はどうせ理解できないから、絵にみとれて楽しんでいる。そんな英語授業ならば、やらないほうがまだ。

語学の勉強にかかるけばけばしさは百害あって一利もない。色彩心理学からいって、きわめて落ち着かない雰囲気をもっていることは、語学を軽視する証拠でもある。意味内容や発音より、視覚的刺激を重視するなら、関心を遊びやゲーム感覚に向かわせる分、英語をないがしろにせよというようなもので、教育的ではなく、悪書である。

残念ながら、現在、市販するテキストのほとんどが、このゲシュタルトを示している。例外は、筆者の知る限り、関西のイエズス会が発行して、全国の進学校に絶大なる人気のある Progress シリーズだけである。この Progress を例外として、他のほとんどのテキストは心得違いをしていると受け止めてよい。ということは、日本女子大においては、市販のテキストには頼れず、独自のテキストを編むしかない、ということである。

3. 内容や語彙の点で、高度すぎる長文や歌が「読み聞かせ」として存在
児童英語として、高1から大人レベルのセンスを必要とする童話や民謡のたぐいが、多く児童英語のテキストとして編まれていることも問題の1つである。古今東西の民話、昔話、イソップ物語、西洋の童話を、前述し

たような、けばけばしい色彩の絵画と共に掲載させている。その例をいくつか挙げれば、Whatever you do, don't open the door. のように、譲歩節が命令文の中に入った複文や、“Because you were honest, I shall give you the golden ax and the silver ax,” the Fairy said. のように、直接話法の被伝達文を複文とし、過去形や未来形を混入させ、直接話法の主文と被伝達文を倒置させている文などである。

これらの用法はいずれも、レベル的にいえば、中3から高校1年生レベルだが、テキストには「英語で読み聞かせ」というサブ・タイトルを付して児童英語のテキストとして編んでいる。これなども、やはり児童英語のテキストとしては、極めて適切性を欠く悪書の一つだろう。聞き手は何が何だか解らないまま、ただ挿絵を見て想像するに終わり、英語ってむずかしいな、僕にはわからない、といった印象だけが残る。

日本はフィリピンやシンガポールとは違い、日常生活の中で、英語をつかっているわけではない。また戦後の一時期のように、何処に行っても、占領軍 GI がいるわけでもない。したがって、文として聞いたり話したりする機会が皆無であるから、この種の読み聞かせテキストなどは、とうてい理解できようはずもないのである。これなども、よちよち歩きの児童に、最初をつまずきをつくって、英語をわからない、めんどくさい代物と思わせる原因となる。最初をつまずきで、逃げ出したい気持ちを育ててしまえば、これは児童に強迫観念を与え、英語恐怖症にする悪書以外の何物でもない。

III. 市販テキストに頻見される制作者側の傾向

いうまでもなく、市販テキストの制作者側に、児童に悪影響を与えようとする意図があるとは、言っているのではない。彼らはみな、何とか、従来のやり方を脱して、児童に楽しめる英語学習を与えんものと、工夫に工夫を凝らしている。その結果が、上述のように、良書となるはずが、悪書的存在になってしまったというのが、実情であろう。それでは、現在の児

童英語の教育者たちが、どんな配慮をしすぎたために、このような現象を起こしたのか。この課題をもって筆者が収集した市販のテキストを分析総合したところ、以下の5つの傾向に類別できた。

1. “英語嫌い”になることを極端に恐れる傾向

児童英語のビギナーは幼児期か幼児期を経たばかりの小学校低学年の生徒である。この時期に英語嫌いにさせると、一生、英語を嫌悪して過ごすかも知れない。その危惧を常に念頭に置くせいか、そのテキストは、遊び感覚やゲーム感覚に満ちている。なるべく勉強ムードを除去するのが望ましいとする傾向がありありと窺える。この傾向を濃厚に感じるテキストはカラフルなイラストを満載させている。英語の難易度よりも、まずとっつき易さだと思うせいか、絵画の氾濫である。良質のものでも、そこに掲載されている単語は、例えば街角の地図を描いて、school, police station, hospital, flower shop, bakery, bank など、イラストの描きやすい名詞群のほか、身の回りの物を描いて、wet, light, heavy, dry, empty, full, dirty, clean などの形容詞を覚えさせる。その数は多い方で、1ページ当たり30個程度、少ないものは5個程度である。これを全部覚えさせれば語彙力は相当につく。だが、テキスト自体、ほんらい記憶量を増やす勉強用にはなっておらず、けばけばしいカラーの漫画本のたぐいであるから、それを使って、豆テストするなど、およそ不似合いな感を免れ得ない。つまり学校用テキストには内容的にも雰囲気的に適さないのである。

だが残念なことに、現在市販のどのテキストも“英語嫌い”にならないように、学習者の機嫌をとるようなイラストが満載されている。これは心得違いであろう。大事なことは、“英語嫌い”にさせない、というような、消極論でテキストを作るべきではない。他より抜きん出て実力をつけてやって、“英語好き”にしてやるぞ、という積極論で作成せねばならない。それがなければ、教育効果は上がらない。筆者が知るところ、現在、その積極論で作られたテキストはイエズス会の Progress シリーズだけである。

大半の児童英語教育者たちは、スタートの時点で早くも、脇道に逸れてしまったという感を免れ得ない。

2. 日常的・会話的内容を重んじ政治経済地理国際性を避ける傾向

幼児期でも小学校低学年でも、世界の国々の子供たちの話には興味があるし、そのような話題は、将来の高い理想を育てるには、大事な題材である。だが、最近の児童英語のテキストには、意図してそのような題材を避け、つとめて日常的なものに視点を移す傾向がある。これは世界の大局を眺めて仕事をする人材を育てるには、はなはだ不都合といわねばならない。末は博士が大臣かといった出世主義も困るが、かといって、街角主義とでもいうか、そんなコンセプトで彩られたテキストに日々馴染ませるのは、公人としての者の考え方より、小さな個人生活だけを大切にするような、矮小な人間をつくり、おのずと、使用言語も、その程度のものに満ちてしまえば、本学のモットーである、女性社会のリーダーを創るという理想からは外れてしまうのである。

英語学習テキストにも、そうした世界観は大切であって、その意味では、現在市販されているテキストで感心するものはなかった。

3. 反復練習を厭う傾向

初期段階における英語教育というものは、教師側が生徒に、にこにここと話しかけ、楽しい雰囲気です授業を進めるものだ、という固定観念から抜け出していない。だから、シチュエーションが、教室内、居間、キャンプ場、スポーツ店、ミュージアム、ゴミ焼却場、楽器店などで、交わす会話はその状況に合わせて展開される。それはよいとして、プラクティスとしての反復やドリルを入れていないから、知識としての溜めや、応用力の養成を期待することはむずかしい。すなわち、What color do you like? I like yellow. What subject do you like? I like math. といったやりとりを、学習者にどう身につけさせるか、その配慮を具体的に示していないので、教師

がよほど綿密な計画のもとに反復練習を繰り返さねば、効果をあげることが困難である。この反復練習をせずに、テキストの分量をすべてこなそうとすると、過去・現在・未来のほか、現在完了や簡単な未来時制、さらに1人称、2人称、3人称のちがひ、人称代名詞の変化活用など、基本的なルールの内いずれも学ばせることができず、頭のなかを混乱させただけ、という結果を生むだろう。

4. 中学英語に踏み込むことを極端に恐れる傾向

多様な be 動詞、文の五型、現在・過去・未来など、簡単な時制、疑問文・否定文など、学ぶべきものは、中学英語のテキストにあって、小学英語ではそれを侵犯してはならない、といった、みよな節度が児童英語には存在する。小学校段階ですでに上記のような事項については、先んじて教育してしまつて、中学に入って復習させ、さらに高度で複雑な表現を学ばせる、という発想には至っていない。公立小学校では、指導要領とのからみで、先へ進みたくとも進めない、といった現状にある。私学である本学において一貫教育をおこなうには、まずこの課程を根本から問い直し、独自の課程編成をレイアウトする必要がある。学習者が先に進めば、どしどし高度化した教育を与える要素も具備して、研ぎ澄ませた、先端が高度にそびえたつた方針を打ち出すべきであらう。

概して公教育における児童英語教育の実情はこのような状態である。文科省は教育指導要領の柔軟化を考え、総合科目的な取り組みのもと、中学教師の導入も免許制度に抵触しないようにしているが、他方において、小学校が英語教育でいくら上級志向を示したくとも、中学英語への遠慮から、あるレベル以上のものを教授すべきでないとなれば、公教育における英語教育は頭打ちで、一定のガイドラインを超えられないことになる。

私学が本領を発揮できる点はどこにある。英語教育の段階的改革を徹底しておこなう大方針を学長レベルが打ち出す。これをせずして、小学校英語を少々改善したり、高大連携の英語を行つてみても、一貫性を標榜する

までには至ることはむずかしい。

5. CD を付ければ、児童が自学自習をするだろうと期待する傾向

上記1から3までも同じだが、現在、どのテキストにも CD をつけている。実際には、学習者が相当に高い自覚をもっているか、自宅学習の段階で保護者が意識的に使用してチューター役を務めない限り、この CD 学習は、現実には、ほとんど使われない。それは筆者の体験から実感していることだが、漫画的イラストの混在したテキストは子供たちはテキストとして尊敬せず、それが CD を備えて、自宅勉強しなさいと要求しても、学習者についてはこない。結局、教師側が地味なテキストを使用して、英語朗読のテストを順々にやるから、自宅で CD を使って、お母さまと一緒に勉強してきてね、といわねば、効果を発揮し得ないのである。

他方、従来からある記述型ドリルは、提出しなければならぬし、先生が必ずチェックするから、否応なく自宅で学習する。つまり、実効性を考えた場合、CD による自学自習型よりも、記述型のプリント提出型ドリルの方が、実効を上げるのである。

6. “読み聞かせ”の童話は高度すぎる

このような状況のなかで、“The Golden Ax and the Silver Ax”, “The Country Mouse and the City Mouse”, “Jack and the Beanstalk”などの童話が語られる。この種の教訓的な古典的童話は教材選択としては適切であるが、内容的にけっして単純ではない。文が複雑にならざるをえない。

前にも述べたように、英語を母語とする子供たちは異なり、外国語として学ぶ日本の児童には、それなりのアプローチの仕方があるのである。具体的にいえば、関係代名詞、未来形、現在完了進行形、動詞+目的語+現在分詞形など、中三レベルの事項が多数混在する文を聴くだけでは、まったく理解できないから、このような文法事項を理解させるには、少なくとも3つや4つの例文を板書して説明する必要がある。しかも理解と実力とは

同じではないから、その用例をもって、英文を構築させるところまでやらねばならない。

その上での、CD をつかっての、自学自習なのである。このプロセスを省略して CD を聴かせても、ほとんど理解できず、内容を日本語で教えてもらっていい加減に通り過ぎて終わりとなる。

英語の習い始めは、文法的に解らなくてよい、まず英語的感觉を体感させることだ、という教育論があって、筆者自身、それには一理あると思うが、かといって、上記のように難度の高いものを朗読しては、テキストの内容が完全に上滑りしてしまい、ムードだけを知るとどまるだろう。それは“教育”ではない。それはたんなる“お遊び”である。

7. 児童の語彙力補強が必要だと考える傾向がある

上述のように、現行の児童英語教材は、毎回小テストをして知識量を増強させるような習熟度向上要素を欠落させている。結局は英語ムードをもっただけに終わりそうな雰囲気濃厚にある。そこで、補完的に作られているのが、英単語特集カードである。

現存する教材の中で、唯一、効果ありと思えるのは、このカード方式の単語学習である。これはトランプサイズで、表に英語、裏に日本語。単純にそのカードが500枚程度、用意されている。どれをどう読むか、その練習を事前におこなってから、切り離し作業をおこない、100枚ずつをテスト範囲として自宅学習させる、という方式でテストをやれば、かなりの成果が期待できる。テストは二の次であって、まず楽しく語彙数を増やすこと、それも楽しくやらせる、遊び感覚で、といったセンスでも、ある程度は習得するであろうが、やはり、学校として習得率(歩留まり)を計測するには、テストをするほかに、学習者はその日に向けて、ある種の自覚の高まりの下で、がんばることになる。

現在、公立の小学校の多くは、全校生徒に漢字の特訓をやり、百人一首の暗記大会などをやっている。それに加え、英単語の特訓会を全校生徒を

対象にやっけてわるいわけではない。英語学習はつねに表層的に楽しくあるべきだというような迎合的な考え方を棄て、このようなカードなどで、競争の原理を採り入れて教育することである。教育成果も大いに上がるであろう。

ただ、市販のものは、語彙集をただ乱脈に集めてあるだけである。本学専用のものを作るとすれば、5段階程度に分類して、語彙数2000ぐらいを目標に進行させれば、英語を目玉とする一貫教育校として、俄然精彩を放つであろう。

IV. 知力に相応した一貫教育のレイアウトの大切さ

以上のような現状は、本学園として嘆くに当たらない。むしろ世間でみられる試行錯誤を知って、本学園らしい、一貫性のある英語教育システムを樹立する、絶好の機会であると判断すべきである。それをもって、わが学園の魅力の一つにすれば、注目されること疑いなしと思われる。すなわち、付属幼稚園で英語教育の序の口を終え、小学校で初級コースを済ませて、中学で他校では高校でやる程度のものに挑戦し、高校で英語のプレゼンテーションが出来、大学で英語論文が自在に書ける段階に仕上げれば、一貫教育らしい成果となって結実する。

1. 国語教育との並行

これはまた、国語の授業と並行してレベルアップさせるのがよいと思われる。

国語の場合、小学校における漢字や熟語の習得数はきわめて多い。公私立を問わず、夏休みなどには、何百という漢字の宿題を課し、テストをしている。小3のドリル¹を例にとると、放送、神社、図書館、道路、主人公、地区、場所、対立など、かなり観念的・抽象的な熟語も登場している。これを英語に置き換えれば、broadcast, shrine, library, road, protagonist, district, place, confrontation となる。いずれも大学入試のための受験英語

だと考えるところに、日本人の英語理解への偏見が窺える。国語と英語。その語句理解に関して、なぜ同レベルであってはいけないのか。同じ語意を持つ語を、英語ではなぜ10年でなければ、理解できないと考えるか。その因習的概念が現行の児童英語教育界には色濃くある。言い換えれば、目先はイラスト満載で、“地味”から“派手”になったし、“国際的”から“日常的”になったけれども、国語の語意を10年遅延させて覚えさせる傾向は、なんら斬新とはいえない。

2. 知能の発達段階で可能なキャパシティ

頭脳の実力で見ると、8歳で理解する国語の語意内容を、英語では10年遅らせねば理解できないとする考え方。この謬った考え方が明治以来の日本における英語教育を、幼稚で、つまらないものにしてきた。こんなにちの児童英語のテキストを見るに、この因習的価値観はますます高じている感がある。

3. 一貫教育レイアウトの大切さ

漢字という表意文字と、アルファベットという表音文字が成す英単語という表意文字とを、同時進行で覚えさせるぐらいの、英語教育の早期化を実現しても、決して早すぎはしない。むしろ、思考回路の中で、同等レベルの展開を、日本語と英語の両方でできる結果、バイリンガルの語学力と、思考能力の高度化が期待できる。

幼稚園教育の現場をみるに、日本語でも、ひらがなという表音文字を氾濫させている。これはアルファベットと似ていて、漢字表記に慣れている大人は逆に戸惑う。園児にはごく自然に理解できている。私立の幼稚園では、アルファベットも氾濫させて幼児教育に力を入れているが、それが必ずしも段階を追って成果を上げるまでには至っていない。その原因は、幼稚園 → 小学校 → 中学への段階的向上を展望した、知力に相応した一貫教育のレイアウトが確立していないためである。本学では、独自の指導要領

のもとで、英語と国語、両方の進度を睨み合わせてテキストを編むことが大切である。

V. 本学園における英語教育のあり方

以上、児童英語教育の実態を展望してきたが、それでは本学ではどうあるべきか、具体的に提案することとする。下記は全て筆者の成功した経験にもとづく。

1. 大卒から6段階に分類する。

附属幼稚園から大学まで、以下の6段階に分ける。

初段階: 幼稚園にて。身近な単語50個とアルファベット。黒板に書ける程度。英語の歌5曲。園内の道しるべを英語で。英語をつかってお遊戯。テキストとドリルは並行させて、JWU English 1。歌のCDと朗読のCD。英語の時間は毎日10分。ペンマンシップの導入と徹底。声だし書き取り学習+Q&A方式自問自答+pattern practiceの導入。これは“3点セット”として呼んで、高校まで一貫して持続させる。

第2段階: 小学1~3学年。英語テキストでは会話的表現を50個程度。そのテキストに出る単語を、かるた式で200語。英語の歌10曲。その歌詞をそらんじて書けるまでにする。校内に英語のみちしるべ。テキストとドリルは並行させて、JWU English 2。CD類は同上。豆テストも。英語の時間は毎日20分。ペンマンシップと3点セット。

第3段階: 小学4~6学年。英語テキストは、会話的表現と物語。その単語をかるた式で400語。豆テストも。体育や音楽の時間に英語を採用。身体を動かして体得していく。英文のレベル的には、小6で中2程度まで。日→英が、出来ること。平叙文→疑問文、肯定文→否定文、現在、過去、未来など、英文法の基

本は、理屈よりも習熟をつうじて、小1から徐々に慣れさせる。小3レベルで、do, does をもちいる。小6では、did をふくめ、will, shall, must, be going to などにも使えるようにまで挙げる。英語の時間は毎日30分。3点セット。

第4段階: 中1～中3。英語テキストは、pattern practice と、発信型の両方。長文も入れる。朗読、リスニング、ディクテーションも。テキストはドリルを並行させて、語彙数2000語。英語時間は毎日40～45分。宿題も。豆テストも。中3で英検2級をほぼ全員とるぐらいに。3点セット。

第5段階: 高校。高3で、TOEIC600点を目標に。3点セット。

第6段階: 大学。専門性の高い英語を各学科で。英文学科については、教授者により異なる。筆者の教授法については結語部で。

2. 具体的内容(第1～第3段階)

第1段階(幼稚園)

ABCをZまで。大文字・小文字ともに教える。簡単な単語で、この時期にすでに日本に氾濫している英単語、例えば、ゲーム、ペーパー、シューズ、デスク、テーブル、ママ、パパ、バイク、チョコレート、キャンディ、ブック、ノート、カメラ、バッグ、ブラック、ホワイト、イエロー、ドライ、ドッグ、キャットなど、数え上げればきりが無いほどある外来語をカタカナだけでなく、英語のスペリングで教えてしまうことは十分可能である。

幼稚園ではクリスマスに向けて、劇や歌の練習を入念におこなうが、英語の歌を入れたり、それを歌いながらダンスをするなど、体感させることも大事である。

つまり、語学の習得で覚えやすく、忘れにくいのは、声に出して叫ぶがごとく、歌うがごとく発話してやることであり、歌やセリフを通じて、そ

それぞれの意味は何か、それを理解した上で即座に反応させて、覚えさせるやり方が効果的である。

第2段階(小1～3)

その上に、数字と曜日、1月～12月などを教え、さらに、Excuse me. や、Many thanks!、Please wait for me.、Let's sing together.、Shall we dance? など、日常、よくつかう表現を一緒に教えてしまう。

筆者が調査した市販テキストのなかで、ペンマンシップと語彙力増強を狙ったテキストがあり、その表紙には「小学校全般向き」との付記があるが、これなど、ブロック体小文字の単語が、動物、果物、ゲーム、洋服、動作、スポーツ、天気、乗り物、職業などと項目を分類し、なかなかよくまとめている。これなどは、小学生低学年向き。²

筆者が今回取り寄せた80数点の資料(テキスト類)の中に、歌とダンスの両方を手振りを図示して、CDと共に編集しているものがあるが、³ それらも有効であろう。

第3段階(小4～小6)

小学校では、幼稚園で学んだものの上に立って、小1レベルの国語の内容にちかい英文で教えていく。当然、無理が出る。一つには英語の語感に疎い性格の子をどうするかの問題。もう一つは、他の幼稚園から来た子供たちとの差である。これは小→中でも起こりうる。しかし女子大付属校園では、英語の早期教育を教育的特色としているのを承知で入学してきたのであるから、少々のハンデは個人的に頑張らせて、短期間のうちに追いつくよう、努力して貰うしかない。この種の格差を恐れているのは、一貫教育が目玉の早期教育はできない。公平かつ均等なる機会を重視するのが公立の小中であるなら、私立はエリート教育をもって成果を上げ、それに期待を寄せる家庭の子女を教育してこそ、私学としての本領を發揮しうるのである。公立の小中と同じレベルの教育では、女子大が均質化教育、悪く

言えば、大衆教育路線を歩むことであり、それでは公立にはない教育を期待して子女を送る家庭の期待を裏切ることになる。もしその意味で、女子大の小学校では、英語授業をほどほどにやる程度のことならば、日本女子大のエリート教育は達成しえない。

そこで、本学園では、独自のメソウドと目標値を掲げた教育論を樹立し、その沿ったテキストをぜひとも編む必要があるだろう。

その教育論のコンセプトとしては、以下のものが挙げられる。

- ① この時期に学ぶにふさわしい事例を多々入れて、基礎力を養成して、将来性のある、ロジカルな要素を持たせること。
- ② 英語学習に毎日、少なくとも 30 分は充て、忘却をふせぎ、習慣づけに注意を払う。
- ③ 中学英語の標準的語彙数や文法事項にとらわれることなく、帰国子女がもつレベルの語彙数と発話能力、英文構築力をめざした内容にする。
- ④ 幼稚園時代にまったく英語をやってこなかった児童に配慮し、小 1 から小 2 にかけては進行スピードをゆるやかに。小 3 から徐々に学習量をふやし、英文を書くに必要な基礎的文法の知識を教える。
- ⑤ 学習量は語彙数で 1000 語程度。文法事項でいえば、完了形、受動態、関係詞、分詞、動名詞、分詞なども、かんたんな部分で理解させる。
- ⑥ 英語の歌は 20 曲以上。英語の児童劇をやらせる。体育の時間は英語でやらせる。
- ⑦ 反復練習を十分におこなう。応用力をつちかう意味で Pattern practice はやはり必要不可欠なトレーニングとして採用する。
- ⑧ 英検に挑戦させる。
- ⑨ 成績優秀者を褒賞する。
- ⑩ 実力コンテストを年間 5 回程度おこない、成績優秀者に級制度などによる上級・特進をおこない、中学生との対抗試合などにも挑戦さ

せる。

ほかにもやり方が多種あるが、以上は筆者がすでに少人数を相手に実験的におこなって、成果が出た実績をもって推奨する方式である。筆者の場合、まったくアルファベットも書けない小4を二年間で、中3レベルまで仕上げたこともある。すなわち、教育内容と自主トレーニングの指導に細やかな配慮をして、継続性をもたせ、個々の進捗状況やノートまとめの実際にいつも気を配って助言をあたえ、前向きに反復練習をさせることで、見違えるほどの成果が期待できるものであって、これはとくに、小3から小6にかけて、顕著な成果となって現れる。

結 論

筆者が今まで、英文学科の授業で英語をどのように扱ってきたかを述べて、締めくくりとしたい。英語は、訳読式ではない。日本語から英語への翻訳式英作文もやっていない。後期中等教育を修了した学習者には、主として、英語を英語のまま理解する訓練と、膨大な量の語彙を、実践段階で使える方式で覚えさせている。

一例を挙げると、アメリカ文学史の授業である。これは講義物であるが、洋書を使い、各作家・作品および時代背景をすべて英語で講義する式の授業を行っている。生徒の理解度が十分であるか否かは、英語によるノート・テイキングを奨励し、その実態を知るべく、定期的にノート提出をさせてチェックしている。理解不十分と判断された箇所には、そのページの記述内容を別の角度から別の英語表現で説明する。キー・ワードはすべて板書する。それが一回の授業で100近くに昇ることもある。これもアメリカ研究としての“知識量”の増大には不可欠の学習であり、同時に頻出単語を習熟させる訓練でもある。作家・作品の理解にはそれほど多くの英語的知識を必要とする。たとえば、*naturalism*, *urbanization*, *industrialization*, *survival of the fittest*, *social Darwinism*などは、専門家の間では、ごく一般的な用語であるが、高校修了時点の学生にとっては、未知の語彙ばかり

である。このように、ロジカルな段階を追い、けっして市井のレベルに終始せず、知力の増大をめざして教育するには、初等段階からの academic learning の姿勢が必要である。テストは当然、B4 罫紙裏表いっばいに、全英語で記述させる方式を採っており、その成果はきわめて満足のいくものである。

以上の教授法は筆者がニューヨーク州立大バッファロー校英文学科でアメリカ文学の院生を相手に採った教授法であるが、日本女子大の学部学生は真面目についてくるので、ノート点検さえ綿密にやれば、この教授方式はかなりの実効を上げた。それは上述のテスト内容から判断できる。

顧みれば筆者自身、英語のレッスンは小学4年生からである。当時は英米人が周りに皆無の環境で、家庭教師(高校の英語教師)によって、1対1で受けた。この期に徹底してアカデミックな講義を受けた。これが後生の仕事に幸いした。小学6年ですでに仮定法で英作文する技術を習得している。当時、小学校英語はない。町にはリングフォンのレコードが売られるのみ。だが初期教育において、たとえ外国人教師に学ばずとも、自身が帰国子女でなくとも、アカデミックな英語構築力さえ備えれば、その後の自学自習メソウドの確立に役立たせることが可能である。換言すれば、現今の英語教育は、まさにその対極にあって、最初からブロークンな導入をする。卑近な表現をむしろ格好いいとする、市井レベルの英語である。市販のテキスト類はその氾濫で、ロジカルなものを徹底して排除する。それがため、気の毒にも、初学者たちは、英語学習の第一歩から、何が何だか解らないまま、混乱させるのである。この種の教授法はむしろ害毒といわねばならない。また語彙数の点でも、現在のテキストはきわめて少なく、幼児期から小学児童の時期に覚えた数千の語彙は大人になって抵抗なく駆使できることは自明の理であるのに、現行の小学校では、たかだか数十から百程度のレベルしか教えたがらない。これでは、学習者はなべて“買物英語”程度の語学力に終わる可能性がある。本学において、このような展開を初期段階にしてしまえば、とうてい、社会のリーダーを養成することは

できない。本学のような、いわゆる女子教育としての基幹校にある教師陣は、このような社会的役割を果たすべく、それにふさわしい教育内容を、初期段階の英語教育においても、展開する方針を打ち出すべきである。

先日も長年文部省審議官であった小池生夫氏が日本の英語教育の甘さを慨嘆しておられたが、その一端は現在の児童英語教育の教授姿勢にも現れている。将来、日本女子大から英語を駆使する国際的人材を輩出させるには、小学生の段階から、英語教育に真正面から取り組み、将来の academic learner を育てる気概をもって、ロジカルに展開し、知識量をふやし、熟練を重んじて、発信型英語につよい実力を育てることである。それには女子大型の英語教育システムを樹立し、各段階にレイアウトして、実践することである。

注

- 1 『漢字まとめて復習トレーニング』(小学3年生)教学研究社 p. 50
- 2 『キッズクラウン・はじめて書く英単語』(英単語カード&シートつき。小学校全般向き)三省堂
- 3 『英語うたの絵じてん』(親子でうたう)三省堂